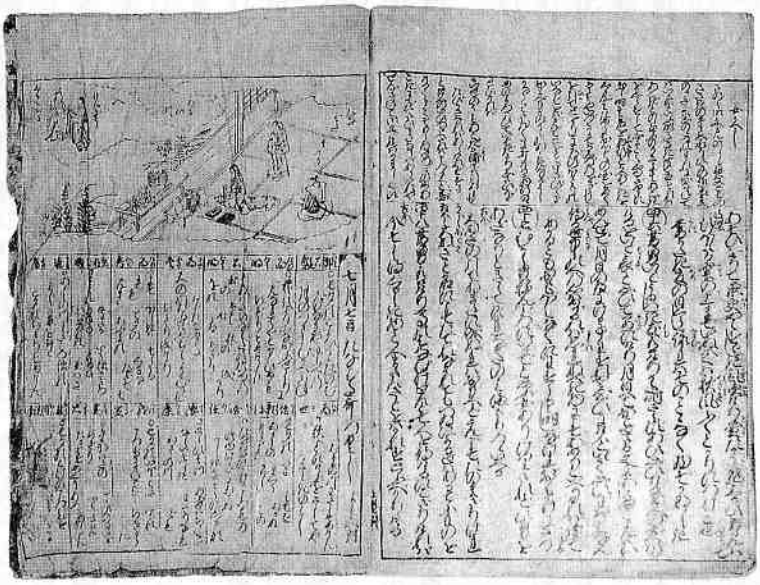
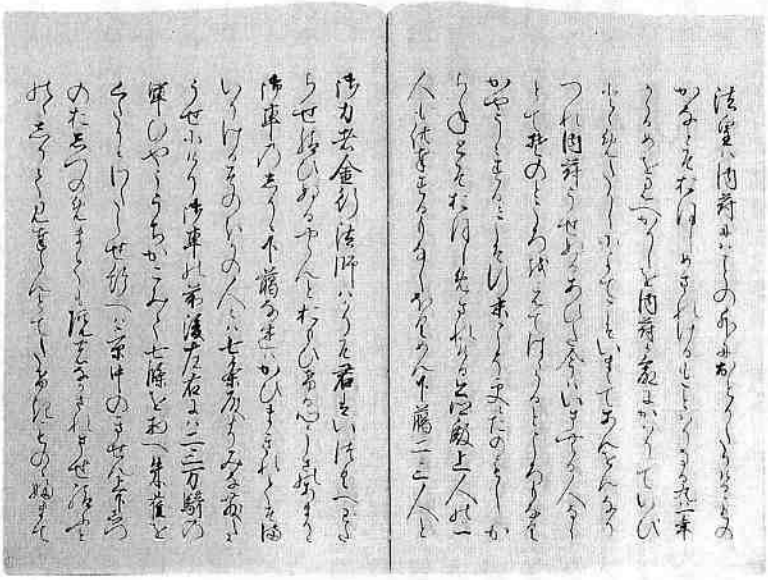
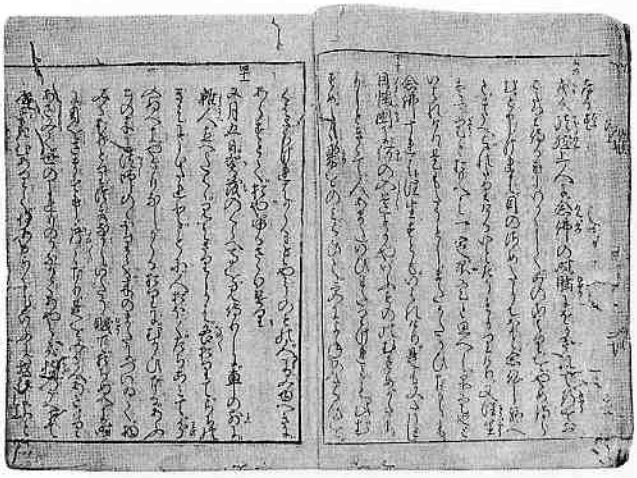


伊勢物語（2-17-1-1）



平家物語（2-17-1-10-6）

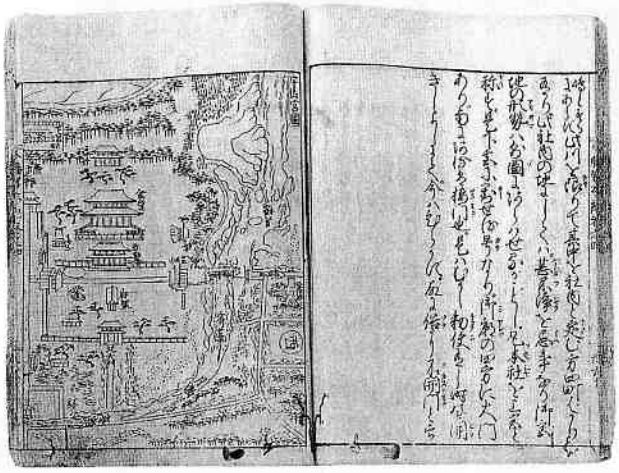


つれづれ草（2-17-1-30-3）

古今和歌集（2-17-2-22-2）

反古文庫設立主旨（2-20-1-481）

宇佐宮寶記（2-2-2-2）



八幡宮本紀（2-2-2-8）

鎮西彦山縁起（2-2-2-3）

序　文

耶馬渓の山水を愛し、この地を永住の地と定め、文化の息吹を吹き込むことに心血を注いだ小野桜山翁が、全国を回遊し蒐集した耶馬渓風物館所蔵の和書漢籍類一万余冊は、本耶馬渓町の貴重な歴史遺産、史料として学術関係方面からも高い評価をいただいております。本町では、昭和五十三年十二月、岩渕精次郎氏の英断によりこの書籍類を御寄贈いただいて以来、その保存、管理、利用の方法について様々な検討がなされてまいりました。幸いにもこれらの書籍類は、昭和四十八年、九州大学名誉教授荒木見悟先生を中心とした国文学、漢文学の先生方によって調査整理され、その目録が刊行されておりました。しかしながらその保存については手つかずで、耶馬渓風物館の収蔵庫に段ボール積めにされ山積みされているという状況でありました。その間、幾度かの水害を経験し、流失したり水濡で原形を留めない書籍も多く、このため再調査を行い、現在の段階で残存する蔵書目録の作成及びそれに伴う保存と機能的な保管が必要となってきました。

こうしたことから、本町教育委員会が主体となり、平成十二年度より緊急雇用対策事業を導入して、本格的に保存を含めた再調査、再整理が行なわれてまいりました。この間、荒木先生には、お住まいの福岡市より幾度となくお越しをいただき、多忙なご公務の傍ら本目録の刊行にひとかたならぬご指導、ご教示を賜り、深く感謝申し上げます。

さて、現在この貴重な和書漢籍類は、耶馬渓風物館の収蔵庫に整然と分類整理され、一冊ごとに収納箱に納められていますが、これでまず文献整理の第一段階が終了したと考えます。書誌学の次の段階へのステップとして、近世の歴史や社会、風習などを学習する上での史料、教材として、いかにしてこれらの文献を活用していくかが今後我々に課せられた大きな課題であると思われます。

こののち、本目録が地域をはじめ、全国の関係者が歴史を研究する上での手がかりとして広く活用され、「吾與渓山誓　奇書万巻蔵（われ渓山と誓う　奇書万巻蔵せんことを）」という創設者小野桜山翁の精神が永く伝承されるよう期待してやみません。

平成十七年一月

本耶馬渓町長　小野和彦

「耶馬渓文庫」とその周辺

九州大学名誉教授　荒木　見悟

耶馬渓の幽邃な山水の美は、江戸時代なかば以降、数々の詩文にうたわれ、すぐれた画題ともなり、広く世に伝聞せられてきたが、このたび本耶馬渓町当局の興学の熱意と綿密な計画により、一万点を超える尨大な国書・漢籍・絵図等を所蔵する「耶馬渓文庫」が、同町の管理する耶馬渓風物館内部に開設させるに至ったことは、山国川畔に異色ある文化拠点を構成したものとして注目せられなければならない。緑隠にかこまれ四季おりおりの変化をみせる花木の中に、日本・中国・朝鮮の奇書珍籍や地図・絵図等が、整然として分類整頓され、感覚と知性とが一体化した独自の空間を出現させることとなったのである。江戸時代の儒者熊沢蕃山は、「山林に霊気あり」といったが、ここではその霊気が、自然美として凝縮したばかりではなく、人知の精華を集める学館としての面貌を加えたのである。なぜこのような自然と人文の一体化した特異な拠点の設立が可能となったのであろうか。それを語るためには、しばらく耶馬渓の歴史を一世紀さかのぼって探究してみなければならない。

明治二十年、小野積（通称は虎太、号は桜山）という生年三十五歳の一漢学者が初めて耶馬渓に分け入り、延々とつづく山村の風物人情に魅了され、平田村西浄寺に寄寓することとなった。元来、小野氏は広島県深安郡の出身であるが、青年時代から備中の阪谷朗廬、大阪の藤沢南岳等について漢文学を修め、さらに長崎・山口等を歴遊して南画・篆刻・茶道の技法をきわめ、学芸を通しての交友は次第に広範囲に及び、すぐれた漢詩文の才能により、小野桜山の名は漢詩壇において一定の評価を与えられるようになった。

耶馬渓を永住の地と定めた桜山は、山水を愛する文人として、いま一つの使命が与えられていることを自覚し始めた。それはここに人間形成の読書楼を築き、日本文化の発展に寄与したいという念願を起こしたことである。だからその「設立主意書」に、「天下ただ読書の人にして、真に能く身を修め、真に能く国を治むべきなり」とのべられているのである。こうして桜山の、古書収集の発願を完遂するための全国行脚の旅が始められた。その学友の増加とともに、集書の事業は着々と進み、ついに「反古文庫（ほごぶんこ）」の額をかかげることとなった。

元来、「反古」とは、「無用な紙」または「無用な書物」の意である。明治の文明開化以来、東洋独自の知的・芸術的遺産は、次第に世人の関心を失い、ともすれば反古のようにかえりみられない風潮すら生まれてきた。一千余人の同志から寄せられた書籍・文物を一括して「反古文庫」と名づけるのは、ある意味で礼を失することであるが、漢学に詳しい桜山は、実はこの言葉により深い意味を込めていたのではなかろうか。それは「反古」という熟語には「古えに反（かえ）る」、つまり「古人の残した文化遺産を護り、それを現代に生かす」の意味が込められていたものと推察されるのである。

明治三十二年、桜山が跡田村羅漢寺指月庵に移住するとともに「馬渓文庫」と改称するが、七年後には青村（現本耶馬渓町大字曽木字青）に居を移し、文庫充実のため、再び全国回遊の壮途についた。その間、桜山の学問領域は、漢学を越えて神道・国学・仏教にまで及び、その方面の諸先覚からも懇篤な賛助を得ることができた。さらに大正十五年には、朝鮮半島を経て中国に遊び、漢文化発祥の現地を訪い、多くの文人に面謁し、みずからの学問を錬磨するとともに、彼地で刊行されたいくたの書籍・拓本等を持ち帰り、文庫に精彩を加えることができた。桜山は終生娶らず、晩年健康を害して以来、門人岩渕精次郎・正義兄弟のもとに身を寄せ、昭和十二年六月二十六日、八十五歳をもって病没した。昭和九年十一月、京都大学教授高瀬武次郎博士は、次のような漢詩を桜山に贈っている。

養生八十有余年　生を養うこと八十有余年
耶馬渓中為老仙　耶馬渓中に老仙となる
書画詩歌皆卓絶　書画詩歌みな卓絶
興来揮筆楽陶然　興来れば筆を揮い楽しみて陶然たり

桜山晩年の人となりをそのまま描写したものであろう。中国の文豪白楽天は、「おおむね山は山を愛する人に属す」とうたったが、桜山

は、山を愛するとともに、書籍を愛し、東洋的文人の志操を実践したのである。

桜山歿後、馬渓文庫保存護持の遺志は、門人岩渕精次郎氏とその嗣子、玄氏に引きつがれたが、戦後の混乱期、特に東洋古典への関心が急速に減退する時潮の中にあって、その事業の継続には、なみなみならぬ苦心と犠牲をともなったことであろう。しかしその一部が河川の氾濫により流失するという悲運はあったものの、一万巻を超える大半の資料は、旧態を存続し得たのである。

昭和四十八年晩秋、本文庫を縦覧された九州大学教授今井源衛氏（国文学者）は、岩渕氏の依嘱を受け、帰学するや、漢文学を専攻する筆者並びに同僚の町田三郎・中野三敏両氏にその整理を依頼された。翌年夏休暇中に、われわれは十余名の学生を引率して岩渕家におもむき、群集する藪蚊とたたかいつつ煩雑な作業を続け、二年後には、不十分ながら一応『耶馬渓文庫蔵書目録』を作成し、耶馬渓風物館より刊行された。

しかるに昭和五十三年十二月、岩渕家の英断により、右の資料一切は、本耶馬渓町に譲渡されて、同町教育委員会の管理下におかれ、公共図書として改めて永世に伝えられることとなった。本文庫が一官銭にも頼らず、全国有識者の熱意の結晶であることを思う時、それは誠に妥当な推移であったかと思われる。同時に町教育委員会は、従来積み重ねてこられた先人の努力と念願とを、そのまま引きつぎ、その管理運営に全責任を負うこととなったわけである。

その後、全資料の再調査により、『目録』作成当時には別置されていた図書が相当数存在することが確認され、平成十二年九月、町教育委員会の招きにより、筆者は二十数年ぶりに中津より山国川をさかのぼることとなった。すでに大学を定年退官していた筆者の微力に、大きな援助をめぐまれたのは、町教育委員会はもとより岩渕玄・武子ご夫妻であった。作業を開始するにあたり、筆者は多年の経験により、古書籍保存にあたりもっとも注意すべきは、虫損にあることを進言したが、町教育委員会は微意を誠実に受けとめ、その手段として、それぞれの図書を個別に収納する函を作製し、それに防虫剤を投入する方法を考案され、直ちに実施に移された。町内有志婦人の方々が交替でその製作作業をつづけられ、日を重ねるにつれ、古書籍はつぎつぎに生気よみがえる形態をもって架上に配置された。それは東洋古典学の長い伝統が、新世紀にふさわしい再起を約束する光芒を放っているものとして、はてしない感動を筆者に与えた。

「耶馬渓文庫」の蔵書は、右にのべたような経緯にもうかがわれるように、学術的体系性を意図して集められたものではないが、桜山翁の多方面にわたる学殖と交友をそのまま反映して、神儒仏より諸芸に至るまで、きわめて広範囲に及び、今日では容易に入手しがたい貴重書も多く、あたかも百花を楽しむような喜びがあふれてくる。多くの書籍にその寄贈者の氏名が記されているように、全国にわたる篤志者の温情こもるこの文庫は、日本人の豊かな感性と知性を反映する殿堂であり、これらの書籍を閲覧するにあたっては、その一紙一葉にこめられた深い因縁と熱情を感受していただきたいと願わずにはいられない。中国の碩学黄梨洲は、書物の運命をいたんで、「書を読むは難し、書を蔵するはもっとも難し。これを蔵すること久しうして教ぜざるは、難くして難し」という言葉を残したが、この言葉をいましめとし、文庫創設の精神が永く伝承されることを期待してやまない。

また、わが国の貝原益軒は、読書の心得として、「ひろく書をよみ学問しても、くはしく思はざれば道理に通ぜずして、明らかならず、心に得がたし。古今、書をよむ人は多けれど、道を知る人稀なるは、書をよみたるのみにて、思はざればなり」といったが、これは読書と思索の一体であるべきを強調したものであろう。簡便軽薄な書物は、一時的な気晴らしにはなっても、根底から人間を形成する威力をもってはいない。「耶馬渓文庫」は、その設置された位置よりしても、来訪者の思索力をいざなう条件にめぐまれている。読書に倦む時は、山国川原を散策し、青の洞門あたりまで足をのばし、淡水魚とたわむれるのも、一興であろう。

本耶馬渓町は、この文庫の設立により、文化の向上と教養の深化をめざす一拠点を提供したことを、広く世人に訴え、新しい東洋文化の創造されることを切望しているのである。

平成十七年一月

凡例

一、本書は耶馬渓文庫蔵書目録である。

二、耶馬渓文庫とは、故小野積（「桜山」と号す。）が日本全国を周遊して蒐集し、一部は中国大陸より持ち帰った図書の総称である。

三、各図書に関する記述事項は、原則として現物のままに依ったが、著者名や刊年の不記入の場合には、できるだけ他の研究機関の蔵書を対照して記入した。

四、本目録は、漢籍と和書（国書）の二大部門に大別したが、漢籍の分類は原則として四庫分類法によった。本邦人の漢文著作もこれに準じて排列した。

五、漢籍と和書（国書）とは、それぞれ大分類、中分類、小分類に大別し、小分類した書籍の各々に番号をつけた。

六、和書（国書）の中、明治以降の刊行物は、その刊年順に排列した。

七、写本については、筆写年の明確なものは記入したが、不明のものは記入していない。

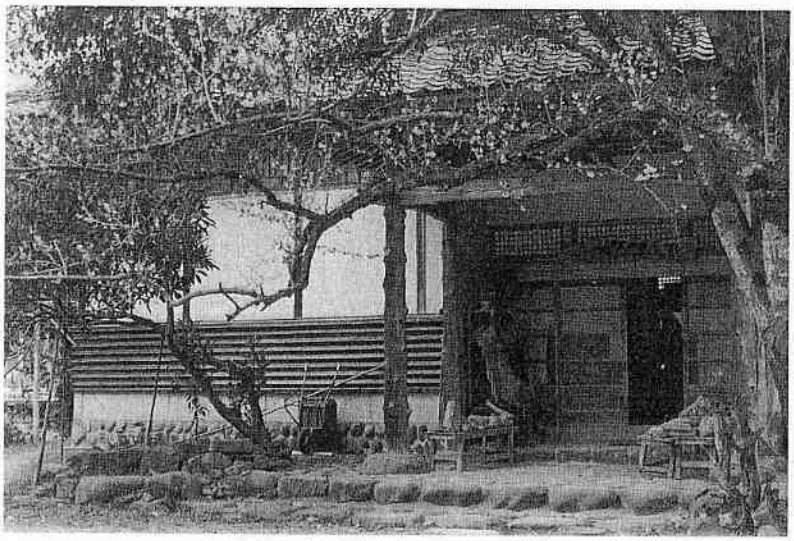
八、刊年が干支でのみ記載されている場合は、著者・発行者等の事情を勘案して、できるだけ数値で示すようにした。

九、漢籍・和書（国書）に関して次のような基準により貴重書を指定し、当該図書の書名の冒頭に「○」の記号をつけた。

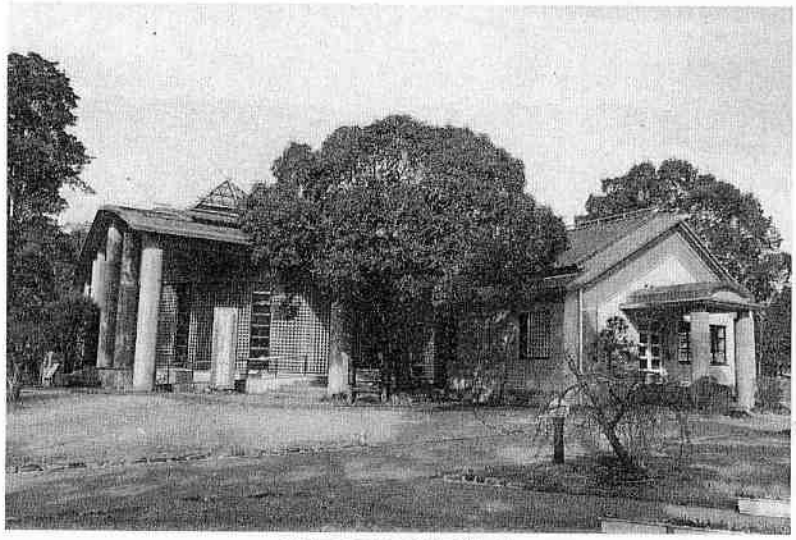
〔一〕漢籍については、清・康熙年間以前の刊本。（ただし端本を除く。）

〔二〕和書（国書）については、江戸・享保年間以前の刊本。（ただし端本を除く。）

〔三〕その他出版年にかかわりなく稀覯本と認められるもの。（ただし端本を除く。）



昭和40年当時の耶馬渓風物館



現在の耶馬渓風物館

耶馬渓文庫蔵書目録

平成17年1月31日　発行

発　行　本耶馬渓町教育委員会
　　大分県下毛郡本耶馬渓町大字曽木1800
印　刷　㈱川原田印刷社
　　中津市牛神9-1